



繪本甲越軍記二編

七

2258
19



池清

門へ遠13
編卷
2258
19

18



繪本甲越軍記二編卷之七

卷第七

自海

金津勢景虎、謀、小、偏、事

宇依、天、治、河、守、埋、伏、金、津、森、軍、之、收、圖

栢崎和泉守、返、忠、討、照、田、の、籠、事

栢崎和泉守、返、忠、討、照、田、の、籠、事

長尾晴景、凱、行、の、事

長尾晴景、凱、行、の、事

原三守、凱、行、の、事

圖

景

新田尾張守内室元見圖

其二

晴景景虎見牙不如此事

有内城下勅孔圖



繪本甲討軍記二編卷之七

金津勢景虎少孫に瀧守事

臨景虎之瀧守事

廻文既に諸城より遠く多し國中の諸將再び起つて長尾より
 一其勢多し又黒田金津の運送等も國中從ひ属する勢
 の上越前よりある譜代餘多勢多し其勢之形他人勢ひ又強なる
 まは之条の城に照回常陸分籠つて根城より黒田和泉より母良
 田九左衛門孫堀守賀守同宗左衛門公兼左衛門右衛門引具くそ
 勢八千餘人の長尾越前守房時が籠るる一箇の城に相寄せ合戦止付
 る一金津伴豆蔵の山下又九左衛門風間河内守森備前守柿原和泉
 守に後景之類と引具く其勢一萬餘人椽尾の城に對向し岡を作り
 鐵炮を打ち改まる城の中より一校岡と岡を強うの精兵を遣りて拵く





會本甲越軍紀二編卷下



會本甲越軍紀二編卷下

入敵 盛

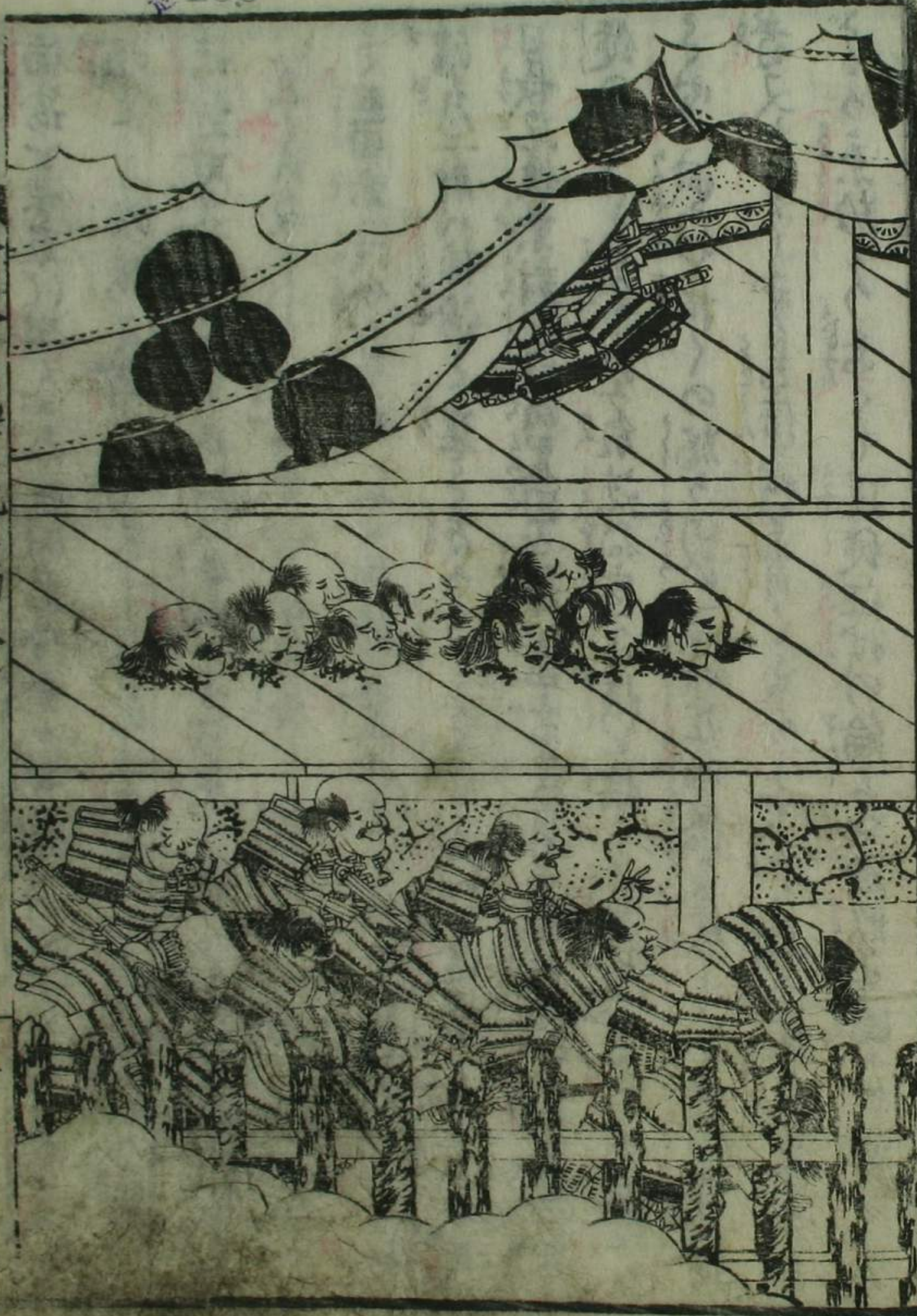
指つり川筋射し中にも戸倉守八を強弓の矢に射る事ありとて夫
庭に指七人と射物し多き先陣の森林備前守の是に射あつた事
て見へたる所本天外も城を圍むおて出陣が備へる事あり
るは勢ひは當りなくとて引く二陣の風間河内守は備前守一
陣堂陣先とて多く突くが本は勢堪ひなく崩す事あり
と敵いんと戸倉守八は清満を射 搦田大守其指二良吉 秋山源兵衛
津部を清を那修理とたおし引具へ射く如雲依羅依羅へ風を
河内守も勇と勅まし切修六下又左衛門風間を助け景虎に討て
ある金津作重も中風間を救へんと喚く事あり本は勢景虎と敵
てありなり互に為と前を押し討てゆく中にも景虎が敵小
島彌太郎 其指二良吉も人へと多敵と引相人陣に射物し人無事所を行

入敵

多くに馳回る景虎備前守は勇と勅まし切修六下又左衛門風間を助け景虎に討て
士率と仕入事も多しと勅すより猶速にゆく敵と惱み射物し其指
一、切修六下、秋山の合津勢を日切崩すこと、敗走し兼く景虎が
謀を定むる秋山源兵衛曾根平之清 搦田大守其指二良吉二十餘人
に袖をひきとり合津津が敗兵はあつて迎へりゆく景虎は然
と油を私しく追之くと清陣の捕縛彌太郎は金津森守が軍と
罵りてゆく事ありと敵は後と見する事あり軍の勢はさる事あり
ま、喚く事ありと敵は後と見する事あり軍の勢はさる事あり
一と景虎大守は討てゆく事あり一番馬は鞭く追出せし長
尾勢はと崩す事ありと敗走し捕縛勢勇も勇と附へ
踏潰せし砂畑と踏まて追之る事あり是を聞き得て合津森の両軍

備前守八の事

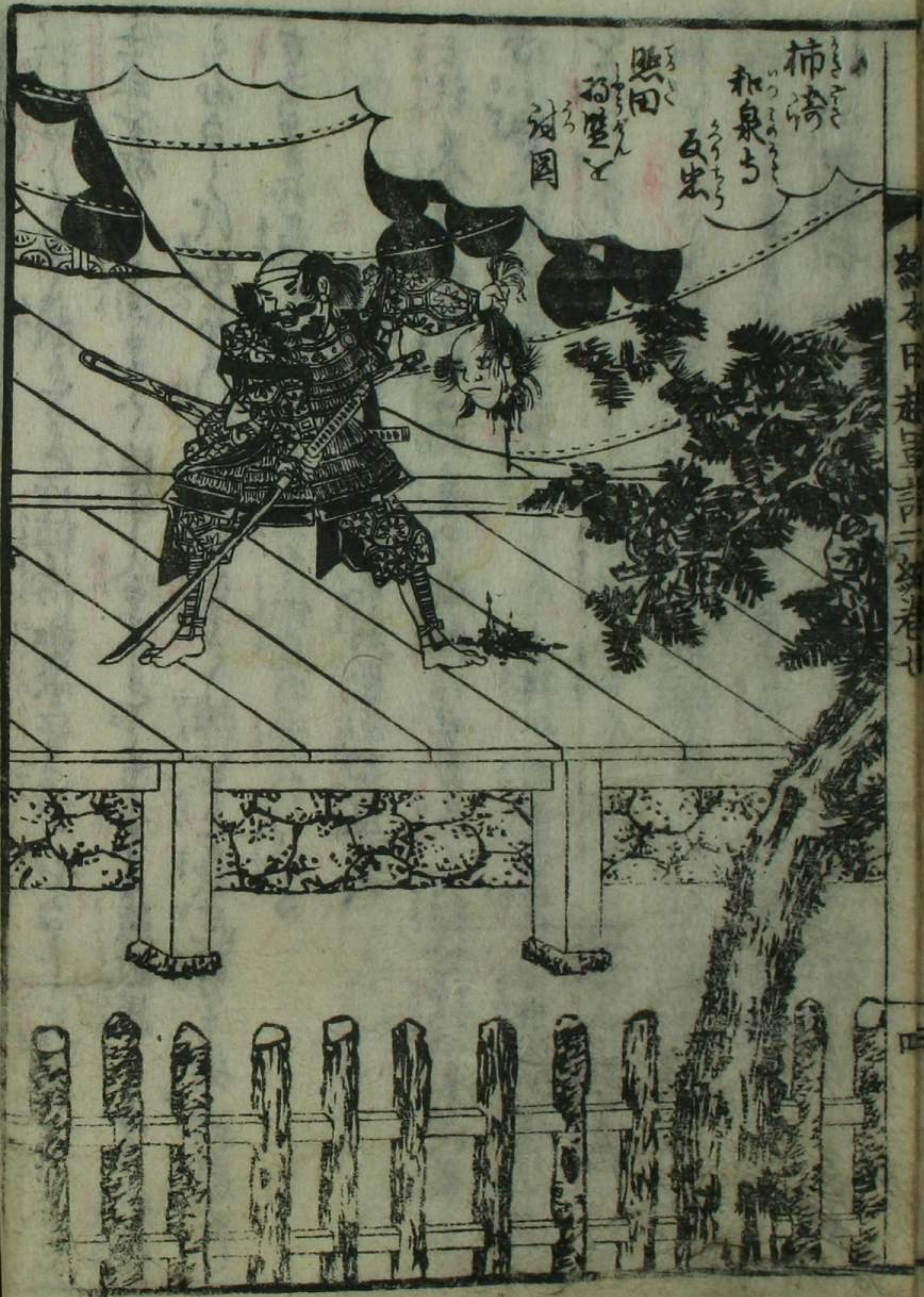
繪本日本書紀卷之七



柿

柿
和泉
百虫
照田
石壁
河國

繪本日本書紀卷之七



敵

約款の名あり古来初の例と同様は是田島が滅びすべ
 二ツより忠殿集に組々先祖軍功の名家と後の上約款の
 速に之款と交せしむに於ては拙者直々執事申すの条神
 無きまゝに名家の後名に貴而の寸意にありと述るるは
 も亦武田黒田父子が上よりまゝに後人傳へて思ひ居るに
 なるが中候より思ひ居るに思ひ居るに思ひ居るに思ひ居
 取と取は是は神の御く士卒のむつるがなるがなるがなる
 約款の名と名と交せしむるに思ひ居るに思ひ居るに思ひ
 授く帷幕に隠して照田が陣へ使と軍議を申す人の名を
 たり且一敵と約で陣中の聲と云ふと云送るるに思ひ居る

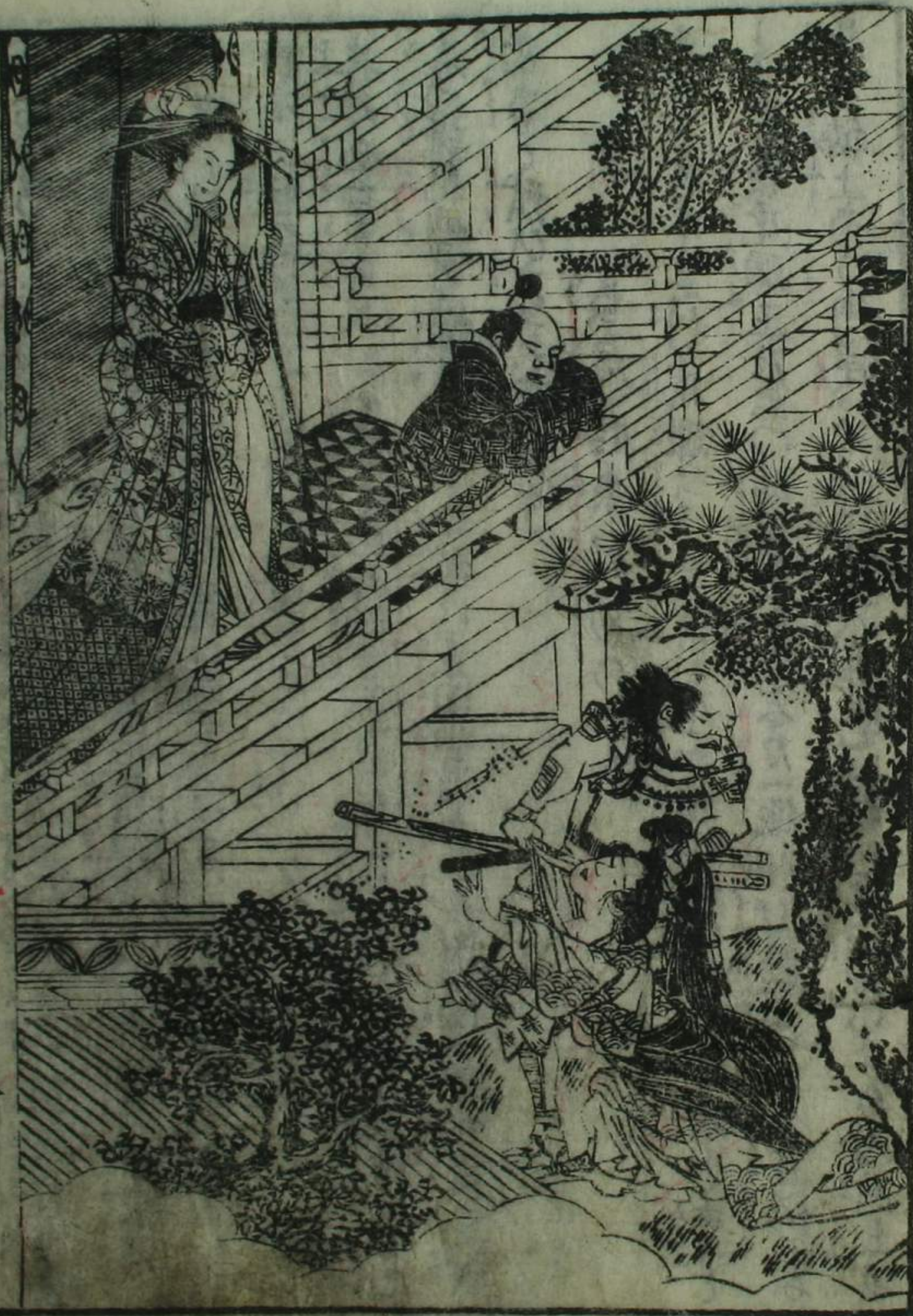
信長日記

柿清と味方に謝んか照田若法分が婢美人の間にあふは
 娘と一柿清又贈り聲と一三の味方ありといはれは
 法分廻文と曰くを其向の由同きは是は當え者柿清
 に思ひ居る一と今津を陣より呼戻し一府内城は若く
 照田若法分が舟橋監は柿清一黨と一まゝして捕縛の
 津美二所へ柿清と其友あり一が家より使を送りて
 日長尾後景討記の後黒田が一類亦言はる一其の法分を
 従のひく見ゆに法分は眼と懐く是人の和を失ふ人の
 こつに滅口と振くの端つけは一味の法分を使し居る
 者又かろすは信義を背くはあらず忠殿未同及びり
 ざるう系はろすも違徒征伐の論をも形は黒田一れ

即

原とてい愛にもわたり柿崎が陣より来りては和泉も奥に陣
 置酒と出でて酒宴を催しけるお監が生質奸佞よしと
 執事の心深きといお監が心を放りて刀と適の後に居て
 が沈碑の体と見く和泉も居從橋本を備用ある侍にて和泉も
 が持へぬ刀と洗たる風情しと取て裁きと人のたの掃へあそ
 い和泉守刀と取らう早くお監も裁きと組大力のお監柿崎が拳
 と取らうまの何故の狼藉するやと互に力を出して組合しお監酒氣の上
 上りては和泉も裁きとお監と組依れし首とゆんといお監力と極め
 蹴起んとすまじも大力の和泉もに組捕ましと取らうと功以年
 竹のば大書よゆん和泉も及近しお監が大書よゆんと取らうと
 同より次の間にお監が裁きと助を腰刀とぬ連を切て

今もい氣よく依りたる救多の力者切て出れ色ん切之らと書く
 討死に和泉もいお監が首と持せて照田が陣使と之照田父子今細
 敵の名と裁きと裁きと首と討て居形とある女も速に降参し
 是の命と助へて裁きと合むにおもく一人も残らば屠り殺し
 と云送らうと裁きと裁きと柿崎が徳威のやと裁きと人纏と陣
 降参しと頭謀邪言と井村後毛尾村町田を島まきと觸目して
 と取らうと裁きと裁きと柿崎が徳威のやと裁きと人纏と陣
 山は造酒助藤田之計を清に地下人と加へ山東郡へ裁きと其
 切取り晴景景虎の力と裁きと長尾方に倫多とゆくと勢と借との同系
 虎と大おとと本社英作も宇佐大駿河も両おと津体巨も山平又



長尾
 彈正左衛門
 長宗
 孔竹の園

大浦の場と戦ひ中条誠前も加地安藤も色江修理亮新發因尾張
 守竹膳在備門尉六十二名大膳亮兼川持津守大川駿河守本庄誠
 神黒門備前守新津彦二郎桃井清七所馬の屋形勢世に因らるる
 野市大膳藤塚宗左衛門森園十左衛門八条九郎右衛門大工藤小次郎
 其外西右志守の黒田勢と河内城黒田城新山村松の城安田の城
 名の懐利懸の懐号に合致は黒田和泉守上田の城相持長尾誠
 前守と戦ひ其の中あり

長尾時系外傳の文

天文十八年足利義輝公正五位下左馬頭に任ぜらるるよりありて
 として長尾彈正左衛門時系より津志乃二條騎馬を足青銅字
 足と執上あり津使に神保小次郎を勅む足利家より津内去城

時系に賜りて作は時景は長尾の嫡流として府内にてまゝと
 不も武道周旋しし法士と愛せむと女色もまゝして侍女尾從館中
 に溢る宴遊は益々の境と知らば是も高は國政の仕立と傳り月
 官の朝花の卒の宴とて相百の婦女と誘ひ遊約ある毎は途中に
 兵月よと女とえあむ諸士農兵のいりあむ人の妻ともせむと棄
 ひく館に納むひ男子の者ありの不致も然く切捨るふ極まを亡
 ひまを奪ふとて遊る者おわび大の遊約と聞かざりて門戸を閉ぢて
 閉る宴はけはけしう着意とて女を中し電をありけ着はあは天
 の勢をありく婿と顔く婿とたてやうる女西村貴妃に芳ら
 ざれば時景はがあふ心を棄てて捨くも側を離れば大なるくわと
 留るは何れはせらるる前集生貨好悪より物も好む侍女を子以

長尾時系外傳の文

愈つて定せらる者甚多し其二三と言ひて時景遊ゆはゆき
 者強きにあつて道の側は平依して居るなりが約の長は日や
 城兼々ん思ひはれとをうらうらと藤原見つけ者大換りしく妻が面
 と見よとらうと武士は令どく其者の両眼と操出させ或はたに女
 と赤木の赤裸いしく其と交らせ又木は約り毛と約してを
 放ちて若しと身と放交般の相に周の寝ぬは異なるは法は眉
 と聲め諫むるとのどと時景短意よして用ざるをいしうと諫はと
 討ある交交りともまば徳山石傍の相桐倉の中は坊と糸掃ひるん
 くる奸臣河渡ひ時景が悪約と助けあつて威持と看のうらぶ世の業
 の長尾の徳とともはありと驚うぬそのことありしるる

京之部 汎舟の女

藤原に一人の丹あり名を原三郎と云初藤原と姓し内は姓七
 時奉十の才婦有るは若らぬ大男にう蟬娟たる繁統おる城眉
 の眉はは好は月は情の百の媚ある上夜顔に綺羅とて一色
 が見る者目と迷はれはと云者うくまうして時景が秀大方なり
 三郎がりやとてあまは若愚のりんだるく用ひぬ奉もあつ
 原三郎がりや其威持老居の上よとては法を重んじむ奉
 大おに並んで見るとらるる愛は新發田の城は新發田尾張ちが内
 室の内は内は館造りて移住くありしがおれも強士の守花の
 室の財をた奪く室は石の本の内橋の蔭に遊ひるるは新發
 田の内室お討の方もは女若堂引連くゆくの花はゆめんと糸掃
 おりての向うより奉の十八九才なるの女奉白小袖は打系を
 打系を打系を



會
外
日
遊
山
遊
三
遊
卷
七



新
田
尾
張
寺
の
花
見
の
必

會
外
日
遊
山
遊
三
遊
卷
七

甲

會本甲越軍記二編卷七



其二



繪本甲越軍記二編卷七

十一

以にけし経津の舟の舟津原三所方にくつりつる物もさばきめくぬ
 の敷まてく書らるるうんとりまをいぬ女も幸ひ面合づくさうさう
 お附の方のほうよりおと竊は思ひの指と指つて深く過さひささか小
 管も一大支の事よと極く群くわをさどもおなごなごなりおは
 て粧もさひささか小管も群するに似るくり試ひかんとお附の方のよと
 情もさうさうお附の方の思ひのよささささ袖のさもゆゆ
 をうらるる淡色と兼くおと細くと指つるさささおの原のさ
 周は應く塩屋の糖いさよあわぬさ上川のゆきとささの互は又のねを
 積りたる其のまお發回尾張の長尾家の信によろくおのまよは陣
 ありさうさうさわと小管もさうさうさうて原の許と女も又作つて
 しくる船輪子のお袖打重紅帽もさうさう頭と隠し口振掃と琴

箱

入る新發回が舟に入るとどもお揃はあささうさうお番番のあさ准あり
 然るまのさうさうおのまよはさうさうさうさうさうさうさうさう
 まの原と許とさの装束も改めおとさうさうさうさうさうさうさう
 備目とさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 鳥もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 妙りに花をさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 一の張文階が仙臺もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 十に油とく眉目の笑と小袖袖指もさうさうさうさうさうさうさう
 袖の移香身もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 くおささの府内の露屋とさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 筆して居るうらが尾張もさうさうさうさうさうさうさうさうさう

源平日蓮宗史記

問
答

とちゆいけ相言ふ事ごとくお付の方も東之部も何度とやと記上りて
 掃粉の躍入りは女侍人を欺て極の厄哉とて其并侍る事
 すと其後敷に有於地馬とて云々終面之部が整と綱と力と何て
 捨付まじ言むべし大方は捨付く是目は血と吐く息絶ぬお付
 の方の近人へ手すまは金剛力は踏付らるる為動有能は叫んとす
 るよお出に放生巻の如くも長を憫慢と只二刀は肩お落せし侍女
 等の魂と天介は死し小淵は陽るもあり或は是寝てる事能ハ
 以目汁働くもあり小智の定宿方を這入つて居たりしをえりしを
 以替女擔ちかゝる女は仕出ぬよと二刀兩段は斬放し殺せし人の侍
 女を殺しはししと打男の斬殺田の城にをとりたる

晴景景虎兄弟不和の本一

晴景景虎兄弟不和の本一

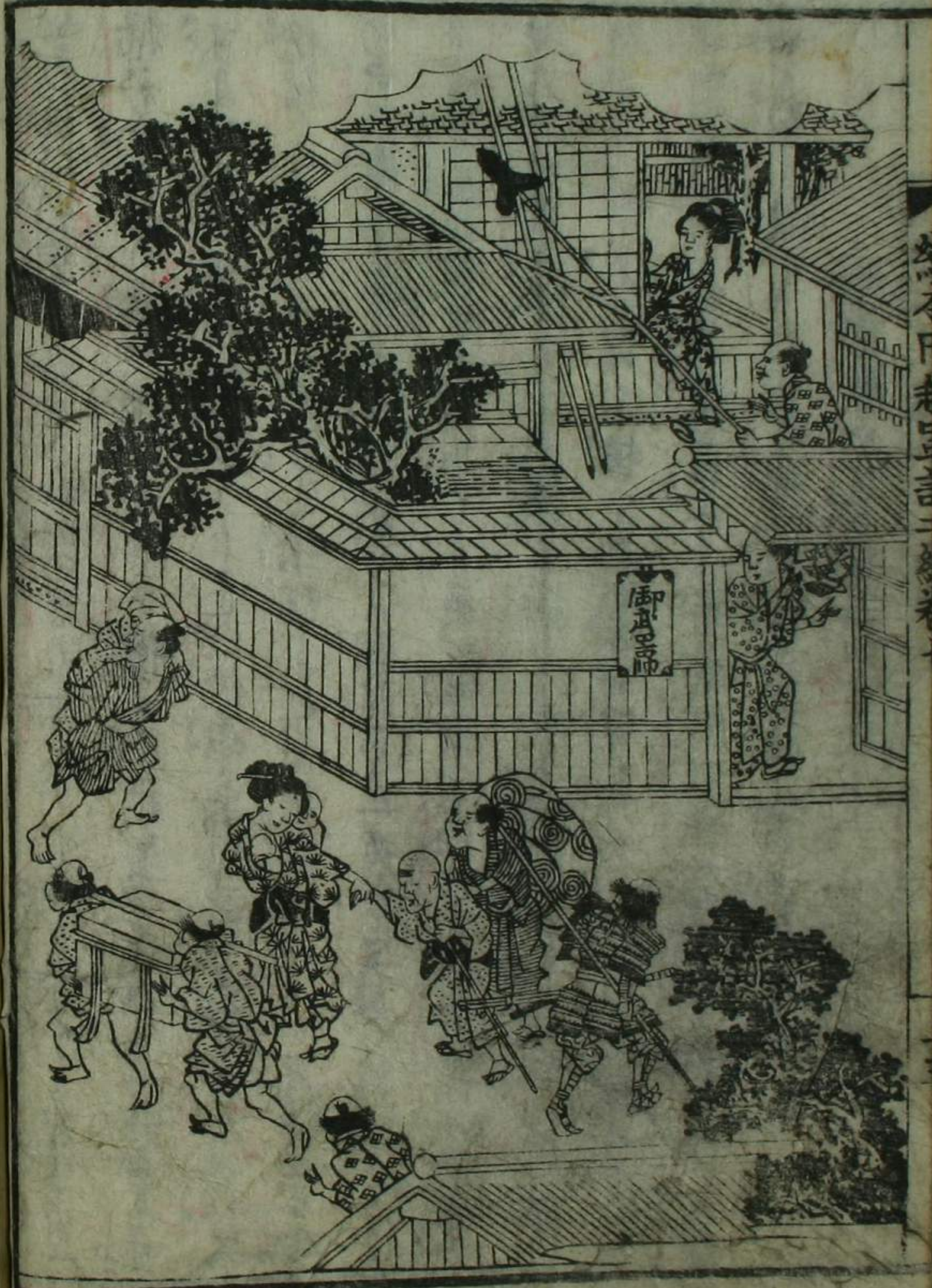
十五

庚

庚

後と風は同村内等の定宿とてはは詰同すとも古き天晴しるるす
 ありは又と紅んと霧の村内の芽や取り何とももる今其侍もまけ
 まは侍女と侍るへ自腹と胸に押當る痛同くは侍女も色むを文能は
 小智が操妙せし一と二十と白痴せり其其徒者ある女とわらひ女と
 以目と周とて一と其積念あること巻を捲て侍るのとらまはも知
 び魚と所へ釣せし女はるる女はよく男は入るを掃粉女一月目へ
 より死なう引提んとせしが其夫海神とていふく敷んと知
 び類くち通し其の更を何ひ身を遊まてく奥よふは侍女お大
 よ替と掃粉が袖を引次無様しく保固はくく身へ何るを所用
 あらばはまきのぬありをいふもん度思ひもあつて侍へは
 掃粉女大は取り出お一高城を用の言をば事勿きこと

卷



魚之神不我の言... 正法湯の晴景大... 取らり其是非... かく刑とて... 者あり... ありと... 馬... 分... し... 使... ども景虎何の返...

理

敵

敵

て

と... 虎と... 諫む... 隣國... 強敵... 多く... 女子... にも... 敵と... 景虎が...

どく赤智と繼ぐが長之の守りなりと喜ぶ母合入管領上杉謙吉も
赤勝系がまよふ事と改むる悔いと雖も山内郡とよりく密に
更と徳川氏の利圖で暗系は貴く赤勝系は卑し景虎を
府内を押せんと結ぶ老臣も河内赤系人の如く速く赤勝
退作後の事と終んく先一族長尾越前守景虎の如く長尾氏
身系も使とて景虎征伐の更と終んく赤勝系は改むる
悪むと赤勝も冷方なく密に赤勝系は貴く赤勝系は卑し
赤勝系は改むる事と終んく赤勝系は貴く赤勝系は卑し
赤勝系は改むる事と終んく赤勝系は貴く赤勝系は卑し
赤勝系は改むる事と終んく赤勝系は貴く赤勝系は卑し

敵

内は合戦ありと赤勝を助け資財と南中おぼしむ宛然谷中
の佛にたるとは赤勝にあり河内黒池村松若名新縣の
赤安田新山の如く赤勝を助け資財と南中おぼしむ宛然谷中
又赤勝は冷止らまきく敗れするも赤勝は貴く赤勝系は卑し
勢の引と不審細作を赤勝に同け赤勝系は貴く赤勝系は卑し
由赤勝は貴く赤勝系は卑し赤勝系は貴く赤勝系は卑し
赤勝系は改むる事と終んく赤勝系は貴く赤勝系は卑し
赤勝系は改むる事と終んく赤勝系は貴く赤勝系は卑し

二行

地

中越

